

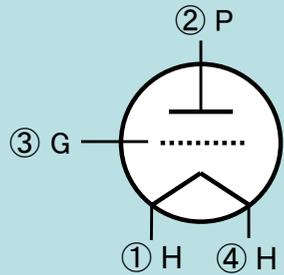
ソケットから見た真空管の歴史

1922年に直熱型三極管201Aが誕生し、そのソケットのピン配置は①ヒーター(H)から始まって、②プレート(P)、③グリッド(G)、④ヒーター(H)となり、その後の直熱型三極管の多くがこのピン配置です。これが真空管のピン配置の基本となります。

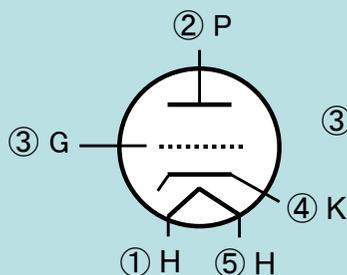
1927年に誕生した傍熱型三極管227(27)はヒーター(H)とカソード(K)が分離したことにより5ピンのソケットが必要になりました。

1930年に誕生した四極管224(24)はグリッド(G1)とプレート(P)の間にスクリーングリッド(G2)を挿入し、G2に高い電圧を印加することにより高周波特性を改善することができました。この場合、6ピンが必要になりますが5ピンソケットをそのまま用いてグリッド(G1)は真空管の頭にトップグリッドを設けソケットの③ピンはスクリーングリッド(G2)となりました。

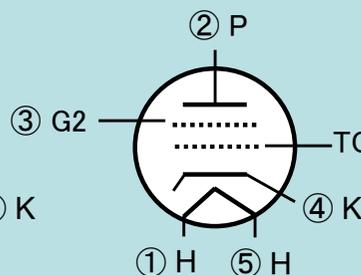
1933年に誕生した五極管57,58はスクリーングリッド(G2)とプレート(P)の間にサブレッサーグリッド(G3)を挿入し、G3をアースすることによりダイナトロン(負性抵抗)特性を防止することができました。これにより6ピンソケットが必要となり④ピンがG3となりました。また、電力増幅用の五極管 42, 2A5は真空管内部でG3をKに接続しG1はトップグリッドではなく④ピンに配置しました。



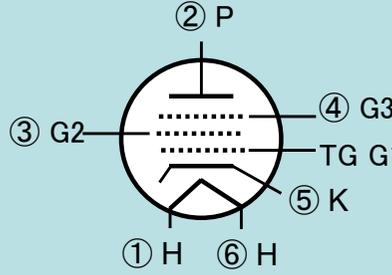
201A, 26, 12A 300A, 2A3



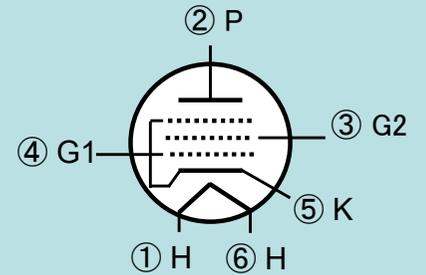
27, 76



24



57, 58, 6C6, 6D6



42, 2A5

